

## 『徒然草』の連語「さも」と引用表現

### A Study on the Collocation “Samo” (so) and the Quotation Form in “*Tsurezuregusa*”(『徒然草』)

安部 清哉\*

ABE Seiya

川口 結\*\*

KAWAGUCHI Yu

**キーワード：**『徒然草』、連語、擬古文、引用表現、「さも」

**要旨：**本稿は、『徒然草』の文体と語彙との関係について、特に「連語」的用法に着目して考察する一連の研究のひとつである。指示詞的用法の連語「さも」を取り上げ、その用法の特徴と、『徒然草』の文章を特徴付けている引用形式の指標の一部としての機能を検討する。『徒然草』の「さも」は、『枕草子』におけるその方法とは異なり、何かの発話や何か過去のエピソード（逸話）を指示ないし引用する時の指示的機能を担って使用され、章段の末尾や話題の重要箇所にて使用されるひとつの指標となっていることを指摘する。

#### 1 はじめに——『徒然草』研究の課題——

本稿執筆者のうち、安部は、連語研究の観点から『徒然草』の語彙と文体の関係を調査し、第1部と第2部との文体的相違、また、第1部の表現の『枕草子』との近似性および擬古的側面、第2部が『枕草子』の文体とも第1部の文体とも異なりより同時代（中世前期）的な傾向を示すこと、などを検討してきた（本稿3節および拙文参照）。それらの分析を通して、「連語」の視点から分析することが『徒然草』の研究では有効ではないかと考えられた。そこで、本稿でも、連語「さも」（指示詞（指示副詞）「さ」+助詞「も」による連語とみなす）を取り上げ、その用法を通して『徒然草』の文体の特徴を考察してみることとする。

なお、「さも」は、『日本国語大辞典』によれば、「副詞「さ」に助詞「も」が付いてきたもの」とあり、「副詞+助詞」という連語ということになる。ちなみに、『日本国語大辞典』（以下、『日国』と略す）における副詞「さ（然）」には次のようにある。

○「さ（然）」——副詞(1)文脈上または心理的にすでに存する事物、事態を、实际的に指示する語。そのように。そんなに。そう。

「指示する語」ともされ、意味記述中には「そう」他もあって、広義にはいわゆる指示語ということもできよう。なお、「さも」の用法を『日国』で確認しておく、次のように3分類されている。(3)は用例からみると中世以降の用法とみられる（下線は引用者による。以下同じ）。

○「さも」——『日本国語大辞典』より、それぞれの意味分類での用例は中世までのも

\* 学習院大学文学部日本語日本文学科

\*\* 学習院大学文学部日本語日本文学科4年

のものを挙げる。

(1) 副詞「さ(然)(1)」を強めたい方。そのようにも。その通りにも。

\*大和物語〔947～957頃〕九四「御いみなどすぐしては、つひにひとりは過し給ふまじかりければ、かの北の方の御おとうと九君を、やがてえたまはむとなんおぼしけるを、なにかは、さもと親はらからもおぼしたりけるに」

\*宇津保物語〔970～999頃〕国譲上「式部卿宮の御かたも、みすなどかけ給へり。対どもには、さもせず」

\*源氏物語〔1001～14頃〕若紫「げにかの国のうちにさも人のこもりぬべき所々はありながら」

\*今昔物語集〔1120頃か〕二九・九「女思ひも不寄ねば、然(さ)も心も不得で有るに」

(2) 副詞「さ(然)(2)」を強めたい方。いかにも。まったく。実に。

\*蜻蛉日記〔974頃〕中・天祿二年「この大夫の、さもふつつかにみゆるかな」

\*源氏物語〔1001～14頃〕若紫「さもかからぬくまなき御心かな」

\*大鏡〔12C前〕五・道長上「中関白殿、粟田殿うちつづきうせさせ給て、入道殿によのうつりしほどは、さもむねつぶれて、きよきよと覚はべりしわざかな」

(3) 程度のはなはだしいことを示す。とても。非常に。

\*宇治拾遺物語〔1221頃〕一・三「こよひの御あそびこそ、いつにもすぐれたれ。ただし、さもめづらしからん奏でを見ばや」

## 2 従来の『徒然草』の語彙研究の課題

さて、『徒然草』は、これまでも様々な観点からの日本語学的研究がなされてきている(研究史は安部(2020.3参照))。しかし、およそこの20年間(2000年以降)、中世の一資料としては利用されるものの、『徒然草』に特化しての日本語学的研究は、一時期より停滞している感がある。語彙、語彙と文体の関係、擬古文文的特徴などの研究も、かつていろいろ提示されてはいるが、その後の新見には乏しいと言える状況にある。

特に語彙や文体の問題に絞って述べれば、ひとつの研究課題である擬古文体とも言われてきているその文体的性格については、後述するように、一部の語彙、文法(特に助動詞、係り助詞など)には一定の成果を示してはいるものの、その擬古文体らしい語彙・語法・文体の特徴、あるいは反対に、中世前期の文章らしい語彙・語法・文体と中古との相違となると、なかなかそれらの全体像を把握できていない、というのが、先行研究を再度見渡して見て現状と思われる。

例えば、次にあげるような、個々の語彙・語法の特徴を解明した研究に倣い、二匹目のドジョウよろしくそれらしい中古語や中世語に当りを付けては、電子データで本文テキストに検索をかけ、平安語彙と比較したり(『日本古典対照分類語彙表』などを利用し)、中世が初出の語や中世特有の語法の事例(『日本国語大辞典』『時代別国語大辞典 室町時代篇』等を利用し)を探してみたりするのであるが、通常の品詞論的語彙単位で電子的本文の検索する程度では、(一部の事例はみつかったも)なかなか芳しい成果を得ることができない。

○語彙・語法の特徴を論じた研究の例(特に文末用法を取り上げている場合は句点「。」を記載した)

「侍り」「候ふ」など敬語表現(佐藤武義(1970))

「む」「とぞ。」および形容詞（木村健（1971））  
「なり。」「べし。」「べからず。」（増淵恒吉（1974））  
「べし」「べきなり」「ものなり」「ことなり」（秋本守英（1978））  
「けり」「き」（白石（1970）、森由美子（1986）ほか）  
「なり」「ず」「む」などの文末表現（遠藤好英（1987））  
「べし。」「べからず。」（齋藤彰（2010））

これらの語彙を取り上げた従来の研究でも、「文末」の語彙や表現、あるいは、多用される助動詞などの語彙という観点では一定の成果は得られている。しかし、それらのような品詞論の単位レベルでの調査を繰り返しても、新しい事例や現象がなかなか増えない。上記の研究でも、同じ語彙（「べし」「べきなり」「べからず」「なり」「む」など）が繰り返し取り上げられていることにも、進展が少ないことがみてとれよう。

そこで、調査視点を変えてみるべく、たまたま他の調査で行っていた「連語」研究の観点（安部の科学研究費による一連の研究や安部（2017）ほか）や、係り助詞の用法の史的変遷の観点（『篁物語』に関する安部（2018））を応用させて、特に「連語」表現について調査してみることにしたところ、比較的興味深い傾向を得ることができた（次節で紹介する）。本稿にては、連語「さも」を調査した結果を報告することにしたい。

その分析に入る前に、これまでの拙論で「連語」表現からみてきた『徒然草』の一傾向を、次節で紹介しておくことにする。

### 3 連語表現の『徒然草』第1部・第2部での偏在

いわゆる広義の「連語」的表現（以下、「連語表現」とす）に着目して『徒然草』での使われ方をみていくと、次のような興味深い傾向がみられた。次に記載したものは、安部（2020.1）、安部・峰尾（2020.3）、安部・川澄（2020.3）にて考察した結果をそれぞれ箇条書き的に示したものである。ここでは、主に連語表現の使用章段（『徒然草』のいわゆる第1部・第2部いずれで使用されているか）を検討している。

#### (1) 連語型文末表現の第2部への偏在（安部（2020.1））

- 連語「とぞ」の章段末部表現「とぞ（言～）。」（「とぞ」53例中24例）の第2部への偏在
- 連語「（～と）申しき。」止め文14例の章段末部表現11例の第2部への偏在
- 連語「形容詞（～かり）+けり。」止め文の多用章段の第2部への偏在
- 文末連語表現「べからず」「あらず」「ものなり」「ことなり」類の第2部への偏在
- 文末連語表現「べからず」61例の第2部への偏在（第18段以外）
- 形容詞評価文の多用章段の第2部への偏在
- 待遇表現「申す」「候ふ」「召す」「参る」の第2部への偏在

#### (2) 接続機能連語表現の第2部への偏在（より中世的か？）（安部（2020.3））

- 連語「～といへど（も）」11例の第2部への偏在（第九段1例が例外）
- 連語「～ものなれば」10例の第2部への偏在（第十九段1例が例外）
- 連語「活用語+ゆゑ+に」（活用語接続用法「ゆゑに」、18例）の第2部への偏在
- 接続詞的連語「～。その+ゆゑ+は」4例の第2部への偏在

- (3) 中古的語彙「あはれ」の第1部への偏在と擬古的表現（安部・峰尾（2020.3））
- 「あはれ」の第1部への偏在（31例中24例、77.4%）
  - 連語「あはれ+なり」の第1部への偏在（22例中19例、86.4%）
  - 擬古的連語表現「係り助詞～あはれ+なり」の第1部への偏在（11例中10例、90%）
- (4) 擬古的連語表現「～こそ+覚えしか」の第1部・上巻への偏在（安部・川澄（2020.3））
- 『枕草子』的表現である擬古的連語表現「～こそ+と+覚えしか」の形式3例の第1部への偏在
  - 連語表現「～こそ+形容語・評価表現+覚えしか」の上巻（第百三十六段以前）への偏在

これらの連語表現の使用章段の偏在傾向から全体的な特徴を推し量ってまとめてみると、以下のような傾向と解釈を導くことができる。

- ア ある種の連語表現、特に、文末表現、および、節の接続部に現れる接続機能を担う表現は、『徒然草』のいわゆる第2部（第三十三章段以降）に偏在する傾向が認められる。
- イ アの点からは、中世的な連語的表現の一部は、第1部ではなく、特に第2部の文体の特徴を形づくっている要素となっていることが考えられる。
- ウ アの傾向とは対照的に、いわゆる中古的な語彙、語法や表現（ここでは中古で盛んであった係り助詞を含む連語表現、および、中古的語彙の「あはれ」など）に関して、品詞論的単位での語レベルではなく、それらを含む連語的表現に着目してみると、それらは『徒然草』の第1部に偏在する傾向が認められる。また、それらは『枕草子』での用法・語法とも一致ないし類似する傾向が顕著である。
- エ ウの点からは、中古的な連語表現は、特に第1部の文体の特徴を形づくっている要素となっていると考えられる。
- オ 上記ア～エのことからは、『徒然草』におけるいわゆる擬古文あるいは擬古的表現と呼ばれるものは、上下巻全体に万遍なくみられるというよりも、むしろ、成立時期がやや早いと言われる第1部に特に偏在していることが推定される。
- カ それらを考慮すると、『徒然草』を日本語学的に考察したり、日本語史資料として利用する場合は、第1部と第2部を区別して扱うのがふさわしいと考えられる。

これらの解釈の適否は、今後もさらなる追跡調査の積み重ねによって検証される必要があるが、いずれにせよ、従来の語彙研究とは異なって、かなり明確な特徴を指摘することにつながったと言えよう。この「連語」という視点が有効であることを示していよう。今後は、連語表現としてとらえられる語連接や、語彙の共起関係の中から、有効な事例を探し出していき、という作業を繰り返していく必要がある。そこで、本稿では、たまたま「引用」の形式のパタンの中から見出した「さも」という連語をたよりに、そこに見出された傾向を考察していくこととする。

#### 4 『徒然草』の引用表現と「さも」との関連

『徒然草』の連語「さも」はわずか9例である。9例における傾向であるので、上掲の4篇の拙論のような、全体に大きく関わるような明瞭な分類指標というほどの強い特徴で

はない。しかし、その「さも」は、辞書的な意味での「指示」や「強調の副詞」「程度副詞」というだけではない、文章（章段）の中でのある種の役割を担って使用されていることがうかがえる。それは、簡略に言えば、『徒然草』特有の「引用の表現」に関わる用法である。典型的な例を、第二十段をもって次に示す。

- 【第二十段】（全文）章段最末尾（「言ふ」と共起、「さも＋覚ゆ＋べし」、主題某とかやいひし世捨人の、「この世のほだし持たらぬ身に、たゞ空の名残のみぞ惜しき」と言ひしこそ、誠にさも覚えぬべけれ。

「さも」は、言わば「そのようにも」「その通りにも」思われるものだ、という意で、直前の引用部分の内容を指示して使用されている。ここでは「誠に」と副詞が直前にあることから、「さも」自体は『日国』の意味記述の(2)や(3)の意味の副詞としての使用ではなく指示副詞としての使用であることがよくわかる。このように、明確にわかる直前の引用表現部分の指示が7例あり、そうでない2例（後掲）も、その直前に縷々述べられている、ある種の説話的内容や、見聞きしたでき事の紹介記事（逸話や奇聞）の内容——つまりは引用されているかのような一定の逸話記事部分——を文脈的に指示する時に、使用されているのである。つまり、『徒然草』の連語「さも」は、『徒然草』の文章の中で、説話、逸話、奇聞の類を受けて、それを指示する時の一定の引用表現形式の一部として機能しているらしいことがみえてくる。それだけなら、単純な指示副詞用法であるから特に注目するほどでもない。しかし、次のような、『徒然草』の文章における顕著な特徴とも関わっている点が注目される。それは、

- ひとつには、特に章段の末尾部分に多いこと、かつ、
- 章段全体のテーマにも関わる部分で使用される傾向が強いこと、また、
- 他の連語引用表現の機能とも類似すること、即ち、
  - ・特徴のひとつとして列挙した、章段末尾部での引用の連語表現「とぞ（言～）。」（「とぞ」53例中24例、第2部へ偏在）、
  - ・同じく章段末尾部での引用の連語表現「（～と）申しき。」止め文（14例中の章段末尾部表現11例が第2部への偏在）

などとの類似である。

このうち、章段末尾部での引用の連語表現「とぞ（言～）。」止め文や、同じく「（～と）申しき。」止め文や、この「さも」に不随する引用表現の共通の機能に注目していくと、次にあげるような共通の形式が、この『徒然草』では特徴的文章表現として特に頻出していることに気づく。ここでは、そのごく一部の例を、拙論で既に紹介している「とぞ（言～）。」止め文や「（～と）申しき。」文とは別の、「『～』と～」という引用語法として抜き出して示してみよう（ここでは特徴的である章段の、最末尾文（「最末尾」と示す）および最末尾の1文前（同「末尾部」）の事例を挙げる）。

#### 〈第1部〉

- 【第三段】最末尾——「『～』とこそ侍れ。」
- 【第六段】最末尾——「『～』と、侍りけるとかや。」
- 【第十段】末尾部——「『～』と人の語りしこそ、さてはいみじくこそと覚えしか。（最後に1文あり）」
- 【第二十段】最末尾——「『～』と言ひしこそ、まことにさも覚えぬべけれ。」
- 【第二十一段】末尾部——「『～』といへり。（最後に1文あり）」
- 【第二十二段】最末尾——「『～』とぞ、徳大寺太政大臣は仰せられける。」

- 【第三十一段】末尾部——「『～』と言ひたりしこそ、をかしかりしか。(最後に1文あり)」

≪第2部≫

- 【第三十三段】末尾部——「『～』と仰せられける、いみじかりけり。(最後に1文あり)」
- 【第三十四段】最末尾——「『～』とぞ言ひし。」
- 【第三十六段】最末尾——「『～』と、人の申し侍りし、さもあるべき事なり。」
- 【第三十七段】末尾部——「『～』など言ふ人もありぬべけれど、(略) うとき人の、うちとけたる事など言ひたる、また、よしと思ひつきぬべし。」
- 【第三十九段】末尾部——「『～』とも言はれけり。(最後に1文あり)」
- 【第四十段】最末尾——「『～』とて、親、ゆるさざりけり。」  
(途中の章段落)
- 【第二百三十六段】末尾部——「『～』とて、さし寄りて、据ゑなほして去にければ、上人の感涙いたづらになりけり。」
- 【第二百三十七段】末尾部——「『～』と、三条右大臣殿おほせられき。(最後に1文あり)」
- 【第二百三十八段】最末尾——「『～』とて、はかり給ひへるとぞ。」
- 【第二百四十三段】最末尾——「『～』と、諸人に語りて興じき。」

これらの引用形式においては、その引用も含めた文体と、引用された説話・逸話・奇聞を展開させる章段構成のあり方が、『徒然草』の論理展開や主題そのものと深くかかわっていることがみえてくる(本稿では、これらや以下の引用の形式を、仮に「引用表現」と呼んでいく)。この引用表現の形式が、上記のように特に章段末尾部(最末尾およびその数文前の範囲)に頻用されていることがわかる。ほぼ全段におよぶこのような類型的表現であるが、見ただけで『徒然草』らしい表現であることに気づくことができる。このような特徴を指摘した研究はまだ把握していない。この話法全体の特徴は、また稿を改めて取り上げることにはしたいが、このことに気づいたのは、「とぞ(言～)」「(～と)申しき。」を取り上げた前掲拙論と、この「さも」での分析であった。

付言すれば、この類型の淵源のひとつとしては、特に章段末尾部での「とぞ(言～)」文については、次の用例のように『宇治拾遺物語』などの和文系統の説話集の文体を指摘することができる(詳しくは別稿を期する)。

◆『宇治拾遺物語』の章段末尾に見られる引用末尾表現「『～』とぞ～言ひける。」の類例(◎は巻十二・14話～17話連続)

- 巻一・17話 章段最末尾 = 「『～』とぞ、京に来て語りけるとぞ。」
- 巻六・4話 章段最末尾 = 「『～』とぞ、人はいひける。」
- 巻十一・11話 章段最末尾 = 「『～』とぞいひけるとか。」
- ◎巻十二・14話 章段最末尾 = 「まことは貫之が詠みたりけるとぞ。」
- ◎巻十二・15話 章段最末尾 = 「『～』とぞいひける。」
- ◎巻十二・16話 章段最末尾 = 「『～』とぞ人いひける。」
- ◎巻十二・17話 章段最末尾 = 「その名を鄭大尉とぞいひける。」

以下では、このような引用表現に関わる「さも」を簡潔に紹介し、また、中古の用法と

【表1】『徒然草』における「さも」の用法

	運番	1	②	3	4	5	6	⑦	8	9	備考=該当章段
分類	章段	五	八	二十	三十六	七十三	百四十二	百五十四	百六十八	百九十四	
	第1部・第2部 (下巻)	1	1	1	2	2	2(下巻)	2(下巻)	2(下巻)	2(下巻)	
①	「さも」の表現	さも覚えぬべし。	さもあらんかし。	さも覚えぬべけれ。	さもあるべき事なり。	「さもなかりしものを」と言はんも詮なくて	さもありぬべき事なり。	さも有ぬべき事也。	「さもあらず」と思ひながら聞居たる、いとわびし。	さもあらんとてやみぬる人もあり。	
②	位置(末尾部)	最末尾	最末尾	最末尾	最末尾	(前半部の末尾の事例部)	(前半部の末尾部)	最末尾	最末尾	(中間の事例部)	5, 8, 20, 36, 154, 168
③	主題を指す	○	○	○	○	(主題「虚言」に関わる話)	○(準主題)	○	(「虚言」「しらぬ事」に関わる話)	(主題「虚言」に関わる話)	5, 8, 20, 36, (142), 154,
④	「あり・なし」との共起	／	○	／	○	○	○	○	○	○	8, 36, 73, 142, 154, 168, 194
⑤	「べし」との共起	○	／	○	○	／	○	○	／	／	5, 20, 36, 142, 154
⑥	指示部の内容を否定する表現での使用					ひとり「さもなかりしものを」と言はんも詮なくて、			「さもあらず」と思ひながら聞居たる、いとわびし。	まことしくは覚えねども、人のいふ事なれば、「さもあらん」とてやみぬる人もあり。	73, 168, 194
⑦	地の文/会話文(含・心話文)	地の文	地の文	地の文	地の文	会話文	地の文	地の文	心話文	心話文	73, 168, 194
⑧	表現形式の2パターン	A	A	A	A	B	A	A	B	B	73, 168, 194
⑨	逸話、あるいは、●虚言	「顯基中納言」の逸話	「久米の仙人」の逸話	「某とかやいひし世捨人」の逸話	「氣の利いた女性に関するある人の逸話」	●虚言=「人の興ずる虚言」全体を指す	「荒夷」の逸話	「日野資朝」の逸話(前段全てを指す)	●褻褻のない話(=虚言)「知らぬ事、したり顔に、おどなく、もどきぬべくもあらぬ人の言ひ聞かする」	●本当らしくない話(=虚言)「まことしくは覚えぬ事」(まことしくは覚えねども)	●虚言=73, 168, 194

比較する意味で『枕草子』と比較してみることにしたい。なお『枕草子』『徒然草』の本文は、原則として旧・日本古典文学大系本により、便宜的に表記を改めた場合がある。

## 5 『徒然草』の「さも」の用法の分類

『徒然草』の「さも」は9例である(【表1】の章段参照、章段番号5、8、20、36、73、142、154、168、194)。7例は「人の発話」を受けている「さも」の用例であり、残り2例は、「人の発話」を受けていない「さも」の用例である。前者の7例(約78%)での引用表現は、「いひけん」(第五段)、「言ひしこそ」(第二十段)、「申侍りし」(第三十六段)、「興ずる虚言は」(第七十三段)、「言ひたりし」(第百四十二段)、「言ひ聞かするを」(第百六十八段)、「人の言ふ事なれば」(第百九十四段)である(他の2例は、第八段、第百五十四段である)。

また、これら「人の発話」を受けた事例での「さも」をみると、「さも+覚えぬべし」、「さも+覚えぬべけれ」という「べし」を伴う表現は第五段と第二十段の2例で、いずれも第1部に現れていることがわかる。また、第2部における「さも」に続く語は全て「あり」が5例、「なし」が1例であり、指示された内容の「有無」を表現する語句と共起するという共通点を指摘できる(活用形は終止形に統一、これら共起語については後述する)。

9例をみていくと、それぞれにいくつかの共通点が見られる。以下に、「『さも』が章段の主題に関わる内容を指示しているか」、「章段内での位置が末尾部か」、「『あり』『なし』と共起しているか」、「『べし』と共起」、などの観点からの分類を列挙し、【表1】として示す。また、章段の主題ではないが、それと相補的分布での使用として、主題の一事例的内容を指示する例が3例見られるので(下記のオ参照)、それを最後に掲示しておく。それは「オ 指示部の内容を否定する表現での使用」で、一定の類似が見られ、「『さもなかりしものを』と言はんも詮なくて」など表現での使用である(【表1】も参照)。

ア 章段内での位置が末尾部（かそれに準じる位置） 7例

最末尾7例＝最末尾6例 第五、八、二十、三十六、百五十四、百六十八段（+末尾に準じる1例 第九十四段）

該当せず 2例＝第七十三、第一百四十二段

イ 「さも」が章段の主題に関わる内容を指示する例 6例

6例＝5例 第五、八、二十、三十六、百五十四段（+準主題的な例 第一百四十二段）

該当せず 3例＝第七十三、百六十八、百九十四段

ウ 「あり」「なし」との共起 7例

7例＝第八、三十六、七十三、百四十二、百五十四、百六十八、百九十四段

該当せず 2例＝第五、二十段

エ 「べし」との共起 5例

5例＝第五、二十、三十六、百四十二、百五十四段、

該当せず 4例＝第八、七十三、百六十八、百九十四段

オ 指示部の内容を否定する表現での使用 3例（イと相補的分布関係で現れる）

3例＝第七十三、百六十八、百九十四段

以下、この後で検証していく9例の用例を列挙するが、【表1】と用例からわかるように、7例は直前の引用部分を指示しており、『徒然草』の「さも」は基本的に引用表現と連動して使用される連語であることがわかる。引用後の6節で考察を加えることにする。

〈用例 9例〉「人の発話」を受けていない「さも」は、黒丸白抜き番号の②第八段、⑦百五十四段。

①【第五段】章段最末尾（「言う」と共起、「さも+覚ゆ+べし」、主題

不幸に愁に沈める人の、頭おろしなど、ふつゝかに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つこともなく明し暮したる、さるかたにあらまほし。

顯基中納言のいひけん、配所の月、罪なくて見ん事、さも覺えぬべし。

②【第八段】章段最末尾（「さも+あり」、主題

世の人の心まどはず事、色欲にはしかず。人の心は愚かなるものかな。

句ひなどは假のものなるに、しばらく衣裳に薫物すと知りながら、えならぬ句ひには、必心どきめきするものなり。

久米の仙人の、物あらふ女の脛の白きを見て、通を失ひけんは、誠に、手足・はだへなどのきよらに肥あぶらづきたらんは、外の色ならねば、さもあらんかし。

③【第二十段】章段最末尾（「言う」と共起、「さも+覚ゆ+べし」、主題

某とかやいひし世捨人の、「この世のほだし持たらぬ身に、たゞ空の名残のみぞ惜しき」と言ひしこそ、誠にさも覺えぬべけれ。

④【第三十六段】章段最末尾部（「言ふ（申す）」と共起、「さも+あり+べし」、主題

「久しくおとづれぬ比、いかばかり恨むらんと、我怠り思ひ知られて、言葉なき心地するに、女の方より、「仕丁やある、ひとり」など言ひおこせたるこそ、ありがたくうれしけれ。さる心ざましたる人ぞよき」と、人の申侍りし、さもあるべき事なり。

- ⑤【第七十三段】章段途中（前半部の最末尾）、「言う（虚言）」と共起、「さも＋なし」、主題、◆心内話

◇冒頭に主題を提示〈前半部〉

世に語り傳ふる事、まことはあいなきにや、おほくは皆虚言なり。

あるにも過て人は物を言ひなすに、まして、年月過ぎ、境も隔りぬれば、言ひたきまゝ語なして、筆にも書止めぬれば、やがて定まりぬ。道々の物の上手のいみじき事など、かたくななる人のその道知らぬは、そゞろに神の如くに言へども、道知れる人は更に信も起さず。音に聞と見る時とは、何事も變るものなり。

かつあらはるゝをもかへり見ず、口にまかせて言ひ散らすは、やがて浮きたることと聞ゆ。

また、我も誠しからずは思ひながら、人の言ひしまゝに、鼻のほどおごめきて言ふは、その人の虚言にはあらず。げに／＼しく所々うちおほめき、よく知らぬよしして、去ながら、つま／＼合はせて語る虚言は、恐しき事なり。わがため面目あるやうに言はれぬる虚言は、人いたくあらがはず。皆人の興ずる虚言は、ひとり『さもなかりしものを』と言はんも詮なくて、聞きゐたるほどに、證人にさへなされて、いとゞ定りぬべし。【前半部の末尾部、主題「人々が興じているそのような空言は存在しないのだ」】

とにもかくにも、虚言多き世なり。たゞ、常にある、珍らしからぬ事のまゝに心得たらん、よろづ違ふべからず。下さまの人の物語は、耳驚く事のみあり。よき人はあやしき事を語らず。

◇結論部分（主題の再述）〈後半部〉

かくは言へど、佛神の奇特、權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは、世俗の虚言をねんごろに信じたるもをこがましく、「よもあらじ」など言ふも詮なければ、大方は誠しくあひしらひて、偏に信ぜず、また疑ひ嘲るべからず。

- ⑥【第四百十二段】章段途中（前半の末尾部）（「言ふ」と共起、「さも＋あり＋べし」、主題

◇冒頭に前半部の主題を提示〈前半部〉

心なしと見ゆる者も、よき一言いふものなり。

ある荒夷の恐れげなるが、かたへにあひて、「御子はおはすや」と問ひしに、「一人も持ち侍らず」と答しかば、「さては、ものの哀は知り給はじ。情なき御心にぞものし給らんと、いと恐し。子故にこそ、萬のあはれは思ひ知らるれ」と言ひたりし、さもありぬべき事なり。恩愛の道ならでは、かゝる者の心に慈悲ありなんや。【前半の末尾部】

◇前半の結論部

孝養の心なき者も、子持ちてこそ、親の志は思ひ知なれ。

◇〈後半部〉

世をすてたる人の、萬にするすみなるが、なべてほだし多かる人の、萬にへつらひ、望ふかきを見て、無下に思ひくたすは僻事なり。その人の心に成て思へば、誠に、悲しからん親のため、妻子のためには、恥をも忘れ、盗みもしつべき事なり。されば、盗人を縛め、僻事をのみ罪せんよりは、世の人の饑ず、寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。人、恆の産なき時は、恆の心なし。人、きはまりて盗みす。世治らずして、凍餒の苦しきあらば、とがの者絶べからず。人を苦しめ、法を犯さしめて、それを罪なはん事、不便のわざなり。

さて、いかゞして人を恵むべきとならば、上の奢り費す所をやめ、民をなで農を勧めば、

下に利あらん事、疑ひあるべからず。衣食尋常（よの=つね）なる上に僻事せん人をぞ、まことの盗人とはいふべき。

⑦【第百五十四段】章段最末尾文（「さも+あり+べし」、前文の逸話を指示、「人の発話」を受けていない「さも」

この人、東寺の門に雨宿りせられたりけるに、かたはものどもの集りゐたるが、手も足もねぢゆがみ、うちかへりて、いづくも不具に異様なるを見て、とり／＼にたぐひなき曲者なり。尤愛するに足れりと思ひて、まもり給けるほどに、やがてその興つきて、見にく、いぶせく覚えければ、たゞすなほに珍しからぬ物にはしかずと思ひて、帰りて後、この間植木を好て、異様に曲折あるを求て、目を喜ばしめつるは、かのかたはを愛するなりけりと、興なくおぼえければ、鉢に植ゑられける木ども、皆掘りすてられにけり。

さもありぬべき事なり。

⑧【第百六十八段】章段最末尾文（「言ふ」と共起、「さも+あり+ず」、主題、◆心内話  
年老たる人の、一事すぐれたる才のありて、「この人の後には、誰にか問はん」などいはるゝは、老の方人にて、生けるもいたづらならず。さはあれど、それもすたれたる所のなきは、一生この事にて暮にけりと、つたなく見ゆ。

「今はわすれにけり」といひてありなん。大方は知りたりとも、すゞろに言ひちらすは、さばかりの才にはあらぬにやと聞え、おのづから誤りもありぬべし。

「さだかにも辨へ知らず」などいひたるは、なほまことに、道の主とも覚えぬべし。まして、知らぬ事、したり顔に、おとなしく、もどきぬべくもあらぬ人の言ひ聞かするを、『さもあらず』と思ひながら聞居たる、いとわびし。

⑨【第百九十四段】章段途中（=複数の独立した一事例中の末尾部）（「言ふ」と共起、「さも+あり」）、◆心内話

◇冒頭に主題を提示〈前半部〉

達人の人を見る眼は、少しも誤る所あるべからず。

◇中間部に具体例〈中間部〉

たとへば、或人の、世に虚言を構へ出して人を謀る事あらんに、すなほにまことと思ひて、いふまゝに謀らるゝ人あり。あまりに深く信をおこして、なほわづらはしく虚言を心得そふる人あり。

また、何ともしも思はで、心をつけぬ人あり。

また、いさゝか覺束なく覺えて、頼むにもあらず、頼まずもあらで、案じゐたる人あり。

また、まことしくは覚えねども、人のいふ事なれば、『さもあらん』とてやみぬる人もあり。【一事例】

また、さま／＼に推し心得たるよしして、賢げにうちうなづき、ほゝ笑みてゐたれど、つや／＼知らぬ人あり。

また、推し出して、「あはれ、さるめり」と思ひながら、なほ誤りもこそあれとあやしむ人あり。

また、異なるやうもなかりけりと、手をうて笑ふ人あり。

また、心得たれども、知れりともいはず、覺束なからぬは、とかくの事なく、知らぬ人と同じやうにて過る人あり。

また、この虚言の本意を、はじめより心得て、少しもあざむかず、構へ出したる人と同

じ心になりて、力をあはする人あり。

◇結論部分（主題の再述）〈後半部〉

愚者の中の戯だに、知たる人の前にては、このさま／＼の得たる所、詞にても顔にても、かくれなく知られぬべし。まして、あきらかならん人の、まどへる我等を見んこと、掌の上の物を見んが如し。但、かやうの推測りにて、佛法までをなずらへ云べきにはあらず。

## 6 『徒然草』の「さも」の用法の考察

### 6-1) 「人の発話」を受けていない「さも」の特徴

「さも」の直前の引用部分における「人の発話」を受けていない「さも」の2例（第八段、第百五十四段）について再度確認してみると、それらも、実際には直前の部分に、人が言い伝えてきた逸話的内容を含んでいることがわかる。直接の人の発話ではないがいわば人々によって語り継がれている内容を指しており、その点で「人の話」を指示している7例の用法に準じる使い方とみなすことができよう。

具体的には、第八段では「久米の仙人」の話を出しており、伝聞した話をもとにして作者は自分自身の考えを述べていることになる。「久米の仙人」という「聞いた話」によって成り立っている章段であり、「人の話（発話）を受けている」ということが言えよう。

第百五十四段も、「この人」という人の「逸話」を元に成り立っており、何らかの形で聞いた逸話が「人の発話を受けている」とも言えよう。

このように『徒然草』における「さも」は、例外的に見えた2例も、「人の話」や「逸話」を聞いた上で章段で用いている点から、他の直接的発話の引用を指示する7例に準じる用法と言える。9例は、人の発話か逸話を踏まえた用法という点で共通していることになる。この点で、連語「さも」は、4節にあげたような『徒然草』独特の引用表現群に関わっている表現ということになる。

### 6-2) 「さも」の章段における内容的相違

ここでは、各章段の内容と「さも」の使用章段との関係を、木藤才蔵（1986）における「徒然草の内容」（『日本古典文学集成』）に基づいてみてみることにしたい（【表2】）。人の発話を受けた「さも」を「さも【ア】」、人の発話を受けていない「さも」を「さも【イ】」とする。この分類に基づいて、「さも」の使用と主題との関係を考察する。

【表2】（「さも」の使用章段における内容分類）

章段内容	章段番号	
	さも【ア】	さも【イ】
作者の感想や意見を述べたもの 総計百二十三章段（50%）		
一、人間あるいは人事について述べたもの		
(1) 人間としての生き方、身の処し方について述べたもの	5	
(3) 日常の態度や行動、人間としての営みについて述べたもの	36・73・168	
(4) 人間の心・本能・本性・心理について述べたもの	194	8
(8) 政治、読書、和歌、旅、音楽、言葉その他について述べたもの	142	
二、自然について述べたもの	20	

逸話・奇聞・滑稽談その他の話を記したもの 総計六十一章段 (25%)		
一、逸話(名前を明記した一人物を中心にした話)を記したもの		
(5) その人柄や生き方をほうふつさせる話		154

(木藤才蔵(1986)「徒然草の内容」による分類を利用。安部(2020.3)参照)

※「さも」【ア】…人の発話を受けた「さも」

「さも」【イ】…人の発話を受けていない「さも」

【表2】からもわかるように、「人の発話」を受けたことに対する「さも」7例の章段は全て「作者の感想や意見を述べたもの 総計百二十三段 五十%」のうちに入っていることがわかった。また、7例中6例が、「人間あるいは人事について述べたもの」(上記の木藤分類によれば計百十八の章段がこれに該当する)に分類され、1例のみが「自然について述べたもの」(同様に計五章段)に分類されている。

一方で、「人の発話」を受けていない「さも」のうち、第八段は「人間あるいは人事について述べたもの」(同様に計百十八章段)に分類されるが、第百五十四段は「逸話(名前を明記した一人物を中心にした話)を記したもの」(上記と同様に計四十三章段)を記したものに分類される。

このように、「人の発話」を受けた「さも【ア】」と、「人の発話」を受けていない「さも【イ】」を、章段の内容ごとに分類すると、「さも【ア】」は全て「作者の感想や意見を述べた章段」で用いられ、「さも【イ】」の一例は「作者の感想や意見を述べた章段」、残り一例は「逸話・奇聞・滑稽談その他の話を記した章段」で用いられていることになる。

### 6-(3) 「さも」の章段内における出現位置

9例中6例(約67%)の章段で、「さも」は章末に用いられている。また、残りの3例である第七十三段、第百四十二段、第百九十四段の「さも」は章末では用いられておらず、章段の半ばに用いられていた。また、第1部では、全ての用例が章末で用いられており、第2部からは章末と章段半ばどちらでも用いられるようになることがわかった。では、「さも」が章末に用いられる用例と、章段半ばで用いられる用例には違いがあるのだろうか。以下、それらの相違について検証を行いたい。

結論から述べると、章末で用いられている「さも」は、会話文中で用いられている第百六十八段を除いて、その章段の結論を強調している働きを有していると考えられる。

第百六十八段を除く五例の用例は、章末で用いられている中でも最終文で用いられており、章段の最後で端的に結論を述べている。一方で、百六十八段の「さも」は会話文中であるため、このような特徴を見ることができなかつたと考えられる。つまり、会話文中ではなく、地の文且つ章末で用いられている「さも」は、章段全体の結論を端的に提示している働きを確認することができた。

次に、章段半ばで用いられる「さも」の三例に焦点を当てると、共通点を見出すことができた。結論から述べると、「さも」が章末ではなく、章段半ばに用いられる場合、その「さも」はその章段内の「具体例」中に用いられていることがわかる(5節の用例参照)。

このように本文を確認すると、章段半ばで用いられる「さも」は、章段内における具体例の部分での用例であることがわかった。第百四十二段においては、章段最終段落でこの長い章段のまとめを記しており、「さも」は具体例中の用例だった。また、第百九十四段

においては、「たとへば」という語に続いて、「また～」の文が羅列してあり、数々の具体例を提示している中に「さも」が用いられている。つまり、章段半ばで用いられた「さも」は、具体例の部分で用いられていると考えられる。

## 7 『枕草子』における「さも」

### 7-1) 『枕草子』における「さも」の出現位置

「さも」は『枕草子』ではどのように用いられているのか、『徒然草』と比較しておく。

『枕草子』の「さも」は27例である。『枕草子』と『徒然草』両作品の延べ語数の比率はおおよそ2対1の比率であるので、27：9は、3：1ではあるが、『枕草子』が突出して多いというわけではない。

【表3】『枕草子』における「さも」の使用章段と出現位置

位置	
章末〔約11.1%〕	章末以外〔約88.9%〕
45・100・181	8・23・25・38・41・49・74・90・90・95・103・103・103・134・134・134・135・143・195・262・269・277・278・278

※重複している算用数字は、「さも」が複数回用いられている章段番号

【表3】は、『枕草子』における「さも」の章段内の位置関係をまとめたものであり、算用数字は章段番号である。このように見ると、『枕草子』の「さも」は『徒然草』とは異なり、章末以外で用いられることの方が多い。章末に用いられた「さも」は27例中3例であり、全体の約11.1%しかない。残り約88.9%の「さも」は章末以外で用いられており、その差は明らかである。

### 7-2) 『枕草子』及び『徒然草』における「さも」の共起語

ここでは、「さも」の共起語について『徒然草』と『枕草子』とを比較する。

まず、『徒然草』における「さも」の共起語について【表4】に示す。

【表4】『徒然草』の「さも」の共起語

共起語	用例数	割合	章段	
			第1部	第2部
あり	6	約66.7%	8	36・142・154・168・194
おぼゆ	2	約22.2%	5・20	
なし	1	約11.1%		73

※活用形は終止形に統一した。

【表4】は、『徒然草』における「さも」の共起語と用例数・割合・章段について表記したものである。『徒然草』における「さも」の共起語は「おぼゆ」「あり」「なし」の3語のみであり、「あり」と最も多く共起していた。

また、第1部・第2部についての偏りだが、「おぼゆ」は第1部のみでしか見られない。また「あり」については、第1部は第八段の一例のみであり、残り5例は第2部での用例

である。そして、「なし」は1例のみで、第2部での用例である。つまり、「おぼゆ」は第1部のみ、「あり」「なし」の有無表現は第2部に偏っている。

次に『枕草子』における「さも」の共起語を確認する。先述したように、『枕草子』における「さも」の用例は27例であったが、本文の全体量を考えると「さも」の比率は『徒然草』とさほど大きな割合の差はないと考える。

【表5】『枕草子』の「さも」の共起語

共起語	用例数	割合	章段
あり	6	約22.2%	103・134・135・143・277・278
いふ	5	約18.5%	38・100・134・134・262
え～まじ	3	約11.1%	23・25・181
侍り	2	約7.4%	8・278
あるまじ	2	約7.4%	195・269
おぼゆ	1	約3.7%	41
なし	1	約3.7%	74
その他の動詞（6語）	7	約25.9%	45・49・90・90・95・103・103

※活用形は終止形に統一した。

※重複している算用数字は、「さも」が複数回用いられている章段番号

【表5】は『枕草子』における「さも」の共起語と用例数、割合、章段について表記したものである。『徒然草』よりも多くの語と共起していることがわかる。【表5】のうち、『徒然草』でも共起している「おぼゆ」「あり」「なし」の3語は既に『枕草子』でも「さも」と共起しているが、用例数自体には大きな相違はない。延べ語数が『徒然草』よりも『枕草子』の方が2倍程度ということ踏まえると、「あり」が同数の6例（「あるまじ」を加えても8例）ではあるが、『徒然草』よりも偏りは少ないことがわかる。

『徒然草』では、3語のみとの共起関係に絞られ、9例と少ない使用ながら表現がやや固定化形式化している様子がうかがえる。

## 8 『徒然草』の連語「さも」の用法の2形式（主題と「虚言」の指示）

『徒然草』における「さも」の用例を『枕草子』とも共に比較してきた。

『枕草子』と比較すると、『徒然草』における「さも」の共起語である「おぼゆ」「あり」「なし」の3語は、『枕草子』における「さも」とも必ず共起していた。「さも」の共起語の数が『枕草子』13語から、『徒然草』では3語のみで表現が固定する傾向が認められた。使用される章段内での位置についても、『徒然草』が章末に偏っていてこの点でも形式化している傾向が認められるが、『枕草子』は章末以外で用いられる割合の方がはるかに高く、そのような傾向はみられない。

『徒然草』における「さも」は、全体の約8割弱が「人の発話」を受けたものであり、また出現位置からもそれぞれ共通点を見出すことができた。章段末に用いる「さも」は、その章段の主題を表示する効果が認められた。一方、章段半ばで用いる「さも」は全て具体例中に用いられていた。

これら出現位置と主題との関わりには章段毎の一定の相関関係が認められるので、改め

て『徒然草』の表1での分類を見ると、「さも」が主題に関わる「虚言」を指し、会話文・心話文で「さも」が現れている3例（第七十三、百六十八、百九十四段）は、他の6例とは異なって、一定の共通性があることがわかる。その3例と他の6例との相違は、概略以下のようになる（仮にA、Bと区分する）。それらを、より詳細にわかりやすく整理したのが【表6】【表7】である（Bタイプとした3例は、表1中の分類⑨で●マークを付した例である）。

- B●「虚言」の3例の共通点＝会話・心話／「虚言」に関わる内容に使用／一事例を挙げている部分／「べし」とは共起しない（第七十三、百六十八、百九十四段）  
 A○その他の6例の共通点＝地の文／各章段毎の逸話の主題を指示する使用／章段の末尾部／「べし」との共起（第八段以外）（その他の章段）

【表6】『徒然草』第1部・第2部の「さも」の連語表現

第1部・第2部	2タイプ、例数	文体	主題との関係	章段内の位置	「べし」との共起の有無	章段
第1部	Aタイプ 3例	地の文 3例	主題	章段末尾 3例	「べし」との共起 2例、非共起 1例	5、8、20
第2部	Aタイプ 3例	地の文 3例	主題 2例 (+準主題1例)	章段末尾 2例 (中間の事例部1例)	「べし」との共起	36、142、154
	Bタイプ 3例	心話文・会話文 3例	「虚言」に関する話	中間の事例部 2例 (最末尾1例)	「べし」と非共起	73、168、194

【表7】『徒然草』の「さも」のA・Bの2タイプ

A・B	「さも」の連語表現	章段
Aタイプ	さも覚えぬべし。／さもあらんかし。／さも覚えぬべけれ。//第2部 さもあるべき事なり。／さもありぬべき事なり。／さも有ぬべき事也。／	5、8、20 //第2部 36、142、154
Bタイプ「虚言」がテーマ（第2部のみ）	ひとり「さもなかりしものを」と言はんも詮なく、（第七十三段）	第2部 73、168、194
	「さもあらず」と思ひながら聞居たる、いとわびし。（第百六十八段）	
	まことしくは覚えねども、人のいふ事なれば、「さもあらん」とてやみぬる人もあり。（第百九十四段）	

【表8】「虚言」章段（第2部のみ）

「虚言」章段	計14例	主題
第五十段	2	鬼についての虚言
第七十三段	7	世に語り傳ふる事、まことはあいなきにや、おほくは皆虚言なり。／皆人の興ずる虚言／世俗の虚言／その他略
第百十七段	1	△友とするにわろき者、七あり。（略）六には、虚言する人、
第百二十八段	1	前半部が虚言の例（「雅房大納言が飼う鷹への犬足餌の逸話」）
第百九十四段	3	△達人の人を見る眼は、少しも誤る所あるべからず。／虚言を構へ出して人を謀る事あらんに（略）いふまゝに謀らるゝ人あり。／虚言を心得そふる人あり。／虚言の本意を、はじめより心得て／

それらからわかることは、Aタイプは第1部でも、第2部でも全巻通して現れていて『徒然草』でのいわば基本的使用法と言える。一方、Bタイプ（3例）は第2部にでしか使われていないので、第2部で表現が多様化してからの使用法とみることができる。別の見方をすれば、第1部ではまだAタイプの用法でしか表現しなかったことになる。また、第2部では、Bタイプの「虚言」が主題であるか「虚言」を指す場面で使用されていることから、第2部になると「虚言」を主題に取り上げるようになったことに連動した表現なのではないか、と推察することができる。そこで『徒然草』の「そらごと」を検索してみると、はたせるかなその全14例は【表8】に示したように、すべて第2部になって使用されており、5つの章段で「虚言」あるいは「虚言」に関わる内容が主題となっているか（4例、第百六十八段のみは「虚言」そのものが章段の主題なのではない）、あるいは、「虚言」がひとつの重要な事例として挙げられていること（第百十七段「友とするにわろき者」のひとつが「虚言する人」）がわかる。

つまり、「虚言」は第2部になってから取り上げられるようになった主題であり、それに連動して「さも」のBタイプが「虚言」に関わる章段での用法として表現されていたことがわかる。

以上、連語「さも」は、9例と少ない事例ながら、このように詳細に整理してみるとわかるように、『徒然草』においては、その文体、第1部・第2部での主題と深く関わって使い分けられており、また、特にAタイプの用法は章段の逸話の主題部を指示する引用表現として使用されていることがわかってくるのである。

今後も、他の連語表現を細かく分析し、『徒然草』の文体と語彙と主題の提示の仕方との関係とを検討していくことにしたい。

【参考文献】（『徒然草』の日本語学関係の先行研究は、安部（2020.3a）の参考文献一覧および研究史に関する章を参照されたい。）

白石大二（1959）「徒然草と中世語法」『講座解釈と文法5』明治書院（敬語表現「侍り」「候ふ」）

白石大二（1969）「徒然草の文法」『日本文法講座4解釈文法』明治書院

白石大二（1970）「『徒然草』における助動詞「き」「けり」」『月刊文法』2-7

佐藤武義（1970）「敬語表現」（『徒然草』特集号）『月刊文法』（8月増大号）2-10（敬語表現「侍り」「候ふ」）

木村健（1971）「『徒然草』における係助詞—「こそ」・「ぞ」の偏在について—」『中央大学国文』14

増淵恒吉（1974）「徒然草の言語 文章」『徒然草講座 第四巻 言語・源泉・影響』有精堂出版

秋本守英（1978）「『徒然草』の表現」『論集日本文学・日本語3中世』角川書店（「べし」「べきなり」「ものなり」「ことなり」）

堀田要治（1983）「徒然草の解釈文法」『国文学解釈と鑑賞』48-2

木藤才蔵（1986）「徒然草の内容」『日本古典文学集成』解説

森由美子（1986）「『徒然草』における助動詞「き」「けり」の再検討」『花園大学国文学論究』14

遠藤好英（1987）「『徒然草』の文章試論—文末表現から—」『文芸研究』114

半藤英明（1992）「係結びのもたらず「強調」の性格—『枕草子』『徒然草』の「こそ」の

場合一」『計量国語学』18-5

半藤英明 (2002) 「徒然草に於ける『ぞ』と『こそ』の近似性」『国文研究』47

齋藤彰 (2010) 「徒然草の表現—〈べし・べからず〉の用法にみる兼好の論理—」『学苑』831

安部清哉 (2017) 「類義連語表現の文型形式から見た構文の種類について」国際連語論学会編『鈴木泰先生古希記念論文集』日本文法研究会

安部清哉 (2018.6) 「係り助詞(ナム・ゾ・コソ)の四文体別変遷史から見た『篁物語』——源順原作説とも照らしつつ——」『国語と国文学』95-6

安部清哉 (2020.1) 「連語から見た『徒然草』——連語型文末機能語と文体——」『シリーズ〈日本語の語彙3〉中世』朝倉書店

安部清哉 (2020.3a) 「『徒然草』の章段内容と分類」『学習院大学文学部研究年報』66

安部清哉 (2020.3b) 「連語から見た『徒然草』第1部・第2部——接続機能表現のプレ近代化と文体——」『論究日本近代語1』勉誠出版

安部清哉・峰尾みやび (2020.3c) 「『徒然草』における「あはれ」の現れ方——第1部・第2部の文体と擬古的側面——」『学習院大学国語国文学会誌』63

安部清哉・川澄香奈 (2020.3d) 「『徒然草』の連語『覚えし』と文体」『学習院大学日本語日本文学』16

安部清哉・川口結 (2020.5) 「『徒然草』の連語『さも』と引用表現」『学習院大学教職課程研究年報』6 (本稿)

【付記1】本稿は、2019年度学習院大学大学院の日本語学演習(安部清哉教授)の主題と指導に沿って川口結が「さも」の基本的初期調査とその発表を経て整理し、それを材料に安部の他の『徒然草』の論文とも照し合せて全体を位置づけ直したものである。

【付記2】本稿は、「連語」に関する次の科学研究費による研究成果の一部である。日本学術振興会科学研究費2017-2019年度基盤研究C(基金)(課題番号:17K02785、代表:安部)